

課題と方法

第一節 課題

本書は日露戦後からアジア太平洋戦争の敗戦までにあらわれた農本思想を対象にして、その理念や実践・運動・政策の歴史的・現代的意味を考察しようとするものである。

農本思想とは、文字どおり「農を基軸にすえた社会思想」である。農とは農業・農村・農民を意味するが、ここでいう農とはその現実態ではなく理想態を指している。したがって農本思想は、あるべき理想から現実を批判する社会変革の思想となる。また従来いわれてきた農本主義をここでは含んでいるが、一般に理解されている農本主義よりも広い範囲の思想を対象とし、また自ら農本主義ではないと否定している思想も含むために、本書ではあえて農本思想と呼称することにした。さらに農本主義という用語が一定の価値観を強く内包した概念となっているため、いったんそうした価値観を括弧に入れるためにも農本思想と呼ぶことをあらかじめ断っておきたい。

さて、それではいまあらためて農本思想を問う意味は一体どこにあるのだろうか。

すでに批判しつくされたイデオロギーとして、農本思想はもはや議論の対象にさえならないのが現状であろう。に

もかわらず、今日あえて私が農本思想をめぐってその意味を考察しようする理由は、一九八〇年代以降の思想的背景を通して浮かび上がる農本思想像が従来のそれとは大きくずれているからであり、またそのことが日本的近現代に対する新たな歴史認識につながると考えているからである。

端的にいえば、農本思想の根底には、多くは自我の発見により自覚された、荒ぶるまた苦悩する生命の爆発をいかに回路づけていくかという情熱が横たわっていた。この生命の回路づけに関する農本思想を、その理念のみならず実践、運動、さらには政策にまで踏み入って、いわば生活をめぐるダイナミズムからとらえてみたいのである。

しかしまずは従来の農本思想（農本主義）研究を一瞥しておこう。

一・農本思想研究の整理

農本主義研究はすでに戦前に始まり、マルクス主義講座派の立場からの桜井武雄の研究（『日本農本主義』一九三五年）をその嚆矢とする⁽¹⁾。そして戦後まもなく、丸山真男による「日本ファシズムの思想と運動」（一九四七年）⁽²⁾が発表され、以後、農本主義の特質を「反官的、反都市的、反大工業的、反中央集権的傾向」（右記丸山論文）に認め、半封建的地主制擁護のイデオロギー、日本ファシズム・イデオロギー、天皇制イデオロギーなどとして批判する把握が一般的であった。こうした支配的認識にあつては、現在残された課題はわずかに地域レベルでの運動に関する個別実証的なケース・スタディぐらいであろう。

このような認識はまた、大正期の農本思想（長野県の農村運動や農民自治会運動に見られる思想）に関しても例外ではない。その認識枠組みは、未分化で混沌とした、ファシズム・イデオロギーたる昭和期農本主義の先駆的形態であるというものでしかなかった⁽³⁾。もちろん「『大正デモクラシー』から『日本ファシズム』へ」というような、いわば日本ファシズムへの歴史的・前提論的視角のみでとらえるのは歴史の一面的理解であろう⁽⁴⁾（傍点原文）とする認識が提示されていた。だが

その反ファシズムにつながる歴史的可能性とは、いわば過渡的状況ゆえの思想のカオス性をもつ非農本部分に見出しているにすぎず、時代の展開による幾つかの「媒介的契機」をへて農本部分が純化・精錬され（「非農本部分がけずりとられ」）「ファシズム・イデオロギーに機能転化」したとみなす。つまり農本部分に関しては、日本ファシズム・イデオロギーとの関連でしかとらえていないのである⁽⁶⁾。

もともと一部では、こうした農本思想をめぐる「権力的把握」に対する批判も存在していた⁽⁷⁾。農本思想受容の多方向性を問題にすべきだというこの提言は、たとえば日本人の精神構造の研究に向かうと同時に、個々の農本主義者のライフ・ヒストリーから思想を内在的に追求・分析しようとする研究を生んだ。いわば農本思想見直し論ともよべるこのような立場は、当時の近代主義見直し論と軌を一にし、一九七〇年代初頭の相次ぐすぐれた著作に結実した。網沢満昭『日本の農本主義』（紀伊國屋書店、一九七一年）、滝沢誠『権藤成卿』（紀伊國屋書店、一九七一年）、松沢哲成『橘孝三郎——日本ファシズム原始回帰論派——』（三書房、一九七二年）である。

なかんずく網沢は、「農本主義思想の効力と限界」とを追求するという問題意識のもと、一連の農本思想研究を現在にいたるまで継続している。しかし結局のところ、「農本主義思想の効力と限界」とを明確に指摘することができないまま、考察対象人物が広がるのみで、右記問題意識が必ずしも有効に機能しているとはいえない。けれどもこうした閉塞状況は一人網沢の責任ではない。その大きな要因は、これまで農本思想に歴史変革の契機ないし効力を認めるか否かという評価をめぐる議論に終始し、否定論・見直し論いずれの論者にも暗黙に共有されてきた前提や認識にあったと思う。

その前提とは、△農本▽が意味する理念内容の変質を考慮せず、それを没歴史的・一義的に「反官的、反都市的、反大工業的、反中央集権的傾向」のみに認めている点である。そしてこうした前提のうえに、第一に農本思想は反近代主義・復古主義である、それゆえ第二に農本思想は伝統的価値観のなかに生きる庶民（ことに農民）をとらえた、第三にそ

の結果として、農本思想は日本ファシズム・イデオロギーあるいは天皇制イデオロギーとして動員された、とする共通認識があった。

だがこのような前提や認識は本当に妥当なものだったのか。むしろ私には、それぞれの概念の曖昧さに加えて、農本思想の本質をかえってミス・リーディングする結果をもたらしたのではなからうかと思われる。むしろ私が考えるところでは、農本思想は理念的な近代主義の一種であったため伝統的世界に生きつつも物質的近代を夢想する農民には受容されず、それゆえ農民を獲得するための転向の結果として日本ファシズム・イデオロギーや天皇制イデオロギーに組み込まれていく、という図式である。もともと農本思想と一口にいつても、意味内容を異にするさまざまな（しかし大きく分けて三種類の）思想があり、実際は複雑に入り組んでいる。その実態を本書が考察していこうと思う。

ともあれ、農本思想の歴史的・現代的意味を再考するには、こうした暗黙の前提や認識をとりあえず括弧に入れておく必要がある。すなわち、農本が意味する理念内容の時代的変質に応じた腑分けをしたうえで、その本質を適切にあらわす新たな概念のもと、農本思想を再付置することが求められるのではなからうか。そして日本ファシズム・イデオロギー、あるいは天皇制イデオロギーとの関連性は、もしかかわったとするならば、どのような農本思想が、いかにして、なぜかわったのか、といった慎重かつ詳細な実証分析が必要であらう。

二、本書の立場と課題

さてそれでは、先に簡単にふれた農本思想をめぐって、私が想定する立場をより詳しく述べておこう。

そもそも農本思想は、江戸期の尊農・尚農といった農を本・商工を末とする儒学の経済論理（熊沢蕃山、荻生徂徠、佐藤信淵など）にその起点が認められ、農を国家維持運営の基軸にすえた体制イデオロギーとしてとらえられてきた。たしかに大正・昭和前期の農政を主導した農本思想は、経済論理としては農業至上主義をとつてはいなかったが、体制維

持強化的な国家観（国体論）を前面に出して、その国家構想において非経済的意味で農を基軸に考えていたことは否定できない。⁽¹⁰⁾

だが昭和恐慌期にあらわれた民間の農本思想においてはそのような理念はじつは希薄なのであり、むしろ特定の社会観（＝農本社会、その中にはアナキズム的な国家の否定にさえ通するような構想もあった）が前面に出て、その（地域社会）構想において農を必要不可欠な基軸にすえたのである。また大正期の農本思想は、昭和恐慌期の民間農本思想とは一部交錯しつつも異なる国家観や社会観に裏付けられつつ、変革さるべき社会、そして国家に生きざるをえない個々人に焦点を合わせ、そうした個々人の生活の基軸として農を構想したのであった。

このように大正・昭和前期に限定した場合でも、農本の意味内容は決して一義的ではなかったことをまず確認しておく必要がある。⁽¹¹⁾ そのうえで当該期農本思想の共通する特質をあえていうならば、農における非経済的価値に注目し、その価値を擁護ないしは追求・実現しようとする思想として自らを表現したところにある。

そうした特徴的な思想が登場した一般的背景には、特殊日本的な社会経済構造の不均等発展があった。⁽¹²⁾ 大正期一九一〇～二〇年代は国内生産額（NDP）にしろる農業と鉱工業の比率が逆転する時期であり（一九一五年＝農林水産業四二・七％、鉱工業二一・〇％、一九二五年＝農林水産業二八・一％、鉱工業三七・七％）、明治期のように農業が国富増進の産業として第一義の意義をもちえなくなっていた。にもかかわらず、就業構造は過半数を第一次産業人口がしめていたのである（一九二七年七二％、一九二〇年五五％、三〇年五二％、三六年四五％）。

すなわち国民経済にしろる農業の地位は相対的には急激に低下していたが、その人口から見れば圧倒的に農業は重要であり農村社会であったことがわかる。第二次産業人口が第一次産業人口を上回るのは、じつに戦後高度経済成長期である一九六〇年代まで待たねばならない。他方欧米では、後発資本主義国であったドイツでも、すでに一九九〇年代には第二次産業人口が第一次産業人口を上回っていたのであり、一九二五年には第一次産業人口三〇％に対して、第二次

産業人口は四二％にも達しているのである。

こうした一般的背景から、当該期農本思想は社会経済的基盤の不均等発展を受けて、農業に資本主義経済下の産業としての意義づけを与えること以上に、むしろ農がもつ非経済的価値をめぐって思想を展開した。経済的には資本主義の展開にともなう非現実的な農業至上主義はとらず、農業を基盤としてその上に商工業の適正な発展を構想する農(商)工並進論を展開したのである。それは農業生産に規制された各産業部門の調和的発展論を意味していたが、総じて当該期農本思想には経済(政策)思想としての構想力は乏しい。むしろ農がもつ非経済的価値を擁護ないしは追求・実現しようとしたところに、その特質を認めることができるのである。非経済的価値とは生命(またその具体的あらわれとしての生活)にかかわる価値であった。⁽¹³⁾

当該期のさまざまな農本思想形成のうえで重要な時期は、じつは明治末期から大正期にかけてである。本書でふれる主要な農本思想家の生年に着目すると、江渡狄嶺一八八〇年、石川三四郎一八七六年、橘孝三郎一八九三年、権藤成卿一八六七年、岡本利吉一八八五年、犬田卯一八九一年、加藤一夫一八八七年、長野朗一八八八年、有馬頼寧一八八四年、加藤完治一八八四年、石黒忠篤一八八四年で、石川と権藤をのぞいて一八八〇～九〇年代に生を受けた世代である。彼らの青年期は明治末期から大正期にかけてであり、この時期は第1章でふれるように自我の問題を避けて通ることができなかった。いいかえれば自我＝生命の問題を根底にすえた思想こそが模索されたのである。⁽¹⁴⁾

こうした動向の一端は、近年「大正生命主義」として研究が進められている。「大正生命主義」とは、「戦争や急速な重化学工業化の展開の中で『生命』の危機感が蔓延し、物質文明批判と利益追求の自由＝生存競争の『近代』を越え、普遍性を求めようとする精神の営みを根幹で支えた思想⁽¹⁵⁾」であった。右記農本思想家たちも多くはこの「大正生命主義」の洗礼を受け、自我の問題を基軸においてそれと農とを結びつけたのだった。

当該期農本思想はいずれの型も生命を肯定し、尊重する。彼らはひとしく生命を、自己爆発する混沌とした力として

とらえていたように思う。したがって、その力を何らかの規範によって制御管理する必要が生じる。だが抑圧するのではない。混沌とした生命の爆発を回路づけることで、生命を理想的に発現させることが可能になると考えたのだろう。この生命の制御管理(回路づけ)方法の相違こそが、同じ農を基軸としながらも、異なるタイプの思想へと分岐させていく原因であった。むしろこの回路づけ方法の相違によって、立ちあらわれる生命の在り方が異なったことはいうまでもない。

こうして当該期農本思想はいずれも人間生命を焦点化し、それをある価値規範に基づいてかたどることで、生命の理想型を追求しようとしたのである。その結果、生命発現の具体的在り方としての生活が対象化され、この生活が操作(創造・維持・改変など)されることになったのである。これが当該期農本思想の本質であった。

以下、本書の課題をより具体的に述べておこう。

第一に、おのおのの農本思想の本質的理念(主観的意図＝志向性)を明らかにする。すなわち個別の農本思想がどのような歴史状況のもとであらわれ、どのような問題設定をし、そして明示されない志向性をも含めて何をめざそうとしたのかを明らかにする。通史的にみて、大正期、昭和恐慌期、戦時期の各時代に、生命の制御管理(回路づけ)方法を異にする三形態の農本思想が有力になった。これら三形態の農本思想の本質的理念を引き出すことで、その可能性と限界とを考察し、またそうした理念の時代的変質をも明らかにする。

しかし第二に、そうした本質的理念が、実際の歴史過程においていかに機能したかをあわせて分析する(客観的結果の考察)。これは、理念を歴史の文脈において検証することにとどまらず、理念の現実化としての生活実践・運動・政策の歴史的意味を考察する作業でもある。本書がたんなる思想史ではなく社会史と称するのも、とりわけ運動や政策を通して人々の生活に接近しているからである。このばあい、理念と生活実態との関係、理念の運動過程における微妙な変容実態、あるいは政策遂行過程における民衆生活との緊張関係(結合・摩擦葛藤・反発など)を通して歴

史的意味に迫っていかうと思う。

そして第三に以上の分析をもつて、結果的に大正・昭和前期における生命の諸問題に接近し、生活（生活世界）という視角から日本的近現代を考察することを意識している。それは現代的関心からの接近である。そもそも生命という問題設定自体、ある意味では一九八〇年代の生命をめぐる諸動向——農に關していえば有機農業を核とするエコロジー運動の高揚や地域主義の主張など——の産物である。そうした状況下、資本や近代の展開過程もしくは国家の肥大化における必然的傾向としての生活世界の他律化について、たとえば権力論のような形での研究が進んでいった。本書は、したがってこのような時代の文脈から再構成された農本思想論であり、その現代的意味を探究するものでもあるのである。

第二節 分析視角と構成

本書は以上の課題を解明するために、生命の発現形態としての生活に注目して分析を進めていく。いわば生活をめぐる農本思想と国策との結合・反発・摩擦葛藤といったダイナミズムを描いていきたいからである。別言するならば、本書のサブ・タイトルに掲げたように、理念においても実態においても生活と国体が交錯していくありようを、農本思想の社会史として明らかにしたいのである。そのため、さらに以下に示す三つの分析視角を設定した。

第一に、前述したように、生命の制御管理方法の相違に着目した。その結果、当該期農本思想は時代に対応して三類型化できる。すなわち大正期の帰農によって自己表現した農本思想は「自然」に自己委任することで（「自然」委任型）農本思想、昭和恐慌期に農本連盟に結集し運動をおこなった農本思想は新たに「社会」（正確には「地域社会」）を創出することで（「社会」創出型）農本思想、また戦時期のとくに厚生運動に自らを仮託した農本思想は「国体」に依存することで（「国体」依存型）農本思想、それぞれ無軌道な生命の爆発を回路づけようとしたのである。

これはしかし、個人が担った農本思想の時代的転回を意味するだけではない。もちろん一部はそうのように転回（＝転向）していったけれども、戦時期にも「自然」委任型や「社会」創出型の農本思想は存在していたのである。したがって明治末期から大正期に起源をもつおのおのの農本思想のうち、どれが時代の潮流にそって強くあらわれたのかという、重層的に重なった農本思想の時代的な焦点移動をも同時に示している。

また理念の送り手―受け手の問題に關しても付言しておこう。大正期のそれは都市知識人個々の実践であったから、送り手と受け手は同一人で自己完結的な構図として示される（理念実践）。しかし昭和恐慌期のそれは、まず都市知識人が理念の送り手として主に農村にむけて発信し、主として農村青年がその理念を受信する。と同時に受信した農村人は、今度は運動主体として個々の農村内部あるいは国家にむけて理念を発信するという構図を示している（理念運動）。そして戦時期のそれは農政イデオログを中心に、農村とともに都市もふくめて広く国民各層を対象として、文学や政策を通して理念を発信し、一部の国民が受信するという構図である（理念政策）。むろん受信をめぐっては、さまざまな摩擦葛藤があったことはいまでもない。また受信してもそこに変質があったり、一部だけの受信という場合のほうが多いだろう。それらは個々の事例にゆだねたい。

さてつづいて第二には、当該期を総力戦体制の進展としてとらえる視角を意識している。¹⁶ 総力戦体制は第一次世界大戦に起源をもち、物的資源の動員から始まってしだいに人的資源の動員も関心を集めていく。近代日本ことに戦時期日本は、国体論が前面に出てあたたかも特殊日本の様相を色濃く反映するが、同時に一九三〇年代以降欧米各国においても進行する国民生活を管理動員していく諸方に注目しなければならない。そうしたいわば普遍的な総力戦体制（動員政策）に日本的な国体論を接合させたところにこそ戦時期日本の特殊性があったといえる。こうして人的資源の涵養政策として（欧米の recreation を戦時期日本に適合させた）厚生が重視され、国民生活が改変の対象となっていくのである。これはまた、計画化ないしは機能的合理化の貫徹という国策理念のいつその展開を意味していた。

農本思想は、戦時期には、その理念適合的なこの厚生運動にかかわることになった。したがって本書は、総力戦体制の展開のなかに農本思想を位置づけていく。このため、日本ファシズム、天皇制、半封建的地主制といった視角から描き出された従来の農本思想論とはかなりずれることになる。ただ前述したように、本書はとりあえずそうした概念をできるかぎり括弧に入れておくにすぎない。むしろ結果的には、日本ファシズム論や天皇制論、また経済史的分析の補完になりうると考えている。

分析視角の第三としては、生命発現の実態である生活に着目するばあい、さらに一歩進めて、その生活の在り方をかたちづくる原動力として生活世界という一種の分析概念を設定することである。本書でいう生活世界とは、いわば生活の核であると同時に、思想や意識的・目的的な行動(運動)を創出し、習慣に支えられた日常的な規範、感性、実感、認識・思考、行為などで構成される場として使用する⁽¹⁷⁾。

この生活世界は通常それとしては自覚されにくいものだが、ある理念に基づいて生活の在り方を変革したり運動にかかわっていくようなばあい、あるいは政策が生活を対象に実施されていくとき、この生活世界には変容が起こるだろう。だから本書では、生活をめぐる実践や運動、政策を、この生活世界の変質という視角からとらえてみたい。また生活世界は、個人を越えて社会的な広がりも有している(共有された生活世界)。すなわち生活形態や社会構造を形成していく力として生活世界という場をあえて設定したのである。

この結果、およそ次のようなことに注意を払うことになった。第一に、思想の分析はたんなる言説分析(理念分析)に終始するのではなく、思想家の生活態度(生活実践)として、習慣や規範、感性、認識・思考などからも考察する必要があるということ。第二に運動分析は、理念レベルでおこなうと同時に、心情も含めてゆるやかながらも共有された生活世界の分析、すなわち前理念分析が必要だと思われること。第三に政策の分析は、民衆の共有された生活世界の内実にまでできるかぎり踏み込んで、そこでの摩擦緊張を浮き彫りにする必要があること、以上である。だが実際の分析は非

常に困難であり、本書でもこの生活世界概念を分析の中心にすることはできなかった。ただ生活の実態やその理念に注目するかぎり、この点をつとめて意識するつもりである。

以上から本書の分析視角をまとめておこう。生命の制御管理方法の相違によって三類型化した農本思想を、総力戦体制の展開という時間軸にすえてその焦点移動に注目しながら、理念・実践・運動・政策に関して生活とりわけ生活世界という分析概念をもちいて考察を進めるという方法である。だが最初に強調しておきたいことは、この分析視角は、あくまで分析の基底にある意識すべき視角にすぎないということである。重要なことは、いうまでもなく、個々の理念・運動・政策の論理を浮かび上がらせることにある。その意味では右記の視角だけをもちいて分析するわけではない。問題は分析視角や方法論それ自体にあるのではなく、浮かび上がってくる農本思想の理念、およびそれをめぐる実践・運動・政策の論理にあることをあらかじめ強く断っておこう。

以下、最後に本書の構成を述べておきたい。本書は大きく三部構成になっている。

第一部(第1―第3章)は大正期の「自然委任型」農本思想をめぐる考察である。同思想は帰農を基底として表明されたが、この帰農行為は絶対的価値である自然への全面的自己委任であり、自然に絶対帰依するところに生命を解放する回路を見出した。第1章でその一般的特質を生活世界の観点から明らかにし、第2、第3章で具体的事例として江渡狄嶺、石川三四郎の思想と実践を検討する。とくに狄嶺と石川の戦時期における生活形態の差異に注目し、その思想の異同を明らかにする。

第二部(第4―第6章)は昭和恐慌期の「社会創出型」農本思想をめぐる考察である。同思想は農本連盟という民間団体に結集した人々によって表明され、新たに創出する地域社会のなかで生命を回路づけようとした。地域問題の発生と地域政策の未成熟という時代状況のなかにおいて、彼らが構想した新しい地域社会とはいかなるものだった

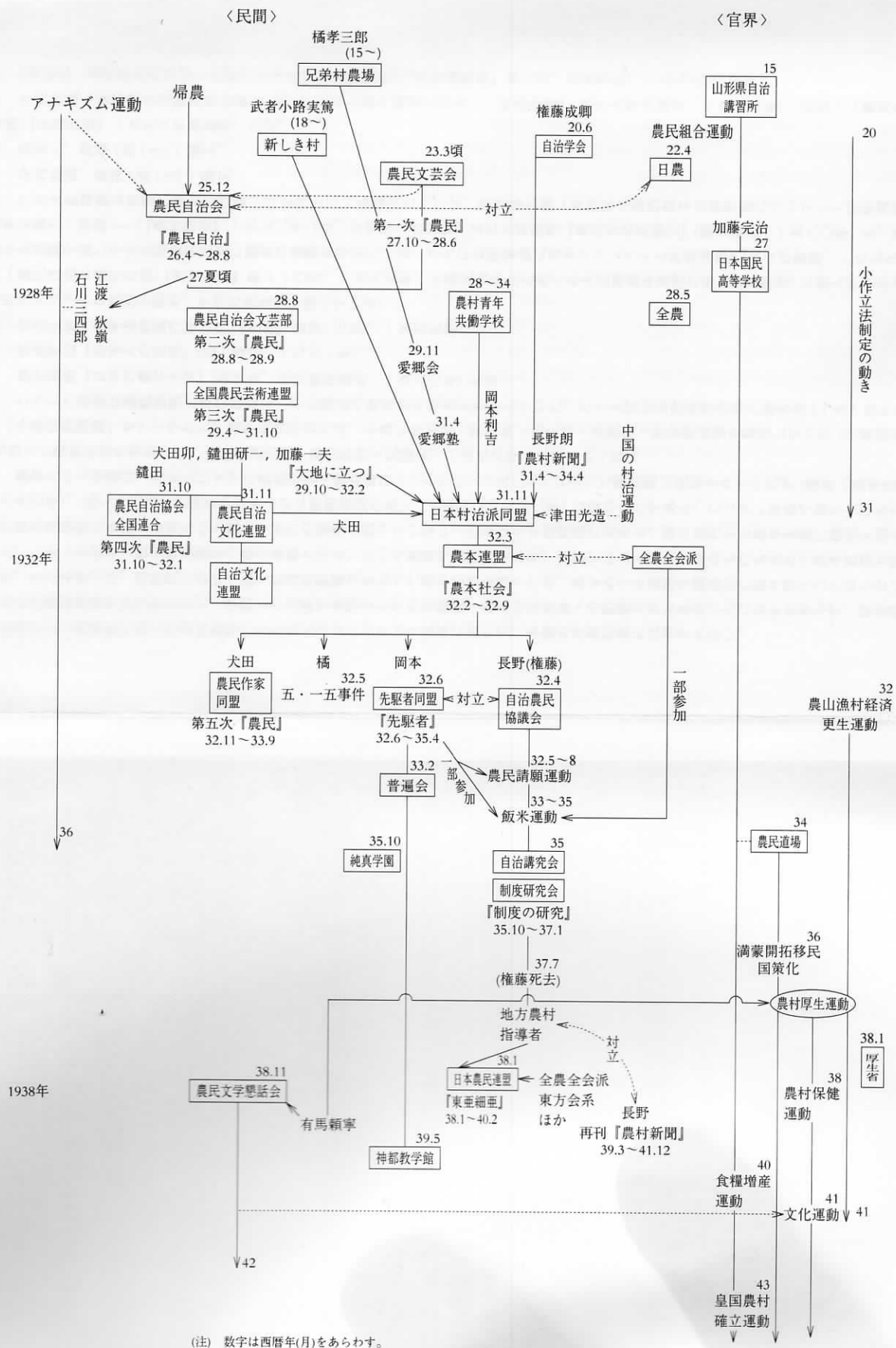
たのか。農本連盟の思想および歴史的位置と同時に、その「地域社会」構想の細部をとりわけ岡本利吉と権藤成卿を中心に考察する（第4、第5章）。また第6章では、村落レベルでの運動の実態を通して現実（生活）との緊張関係から、理念がいかに変質していったかを事例分析として明らかにする。

第三部（第7―第9章）では戦時期の「△国体▽依存型」農本思想をめぐって考察する。第7章では戦時期に強調されていく△国体▽に依存することで生命を回路つけた農本思想の特質を、農政イデオログを中心に農民文学や農本主義運動の変質から検討する。さらに第8章では、農本思想の現実化であった農村厚生運動のなかでも、とくに保健運動を中心にケース・スタディ（滋賀県湖北地域）をおこなう。また第9章では第8章の補足として、厚生運動の主要な一翼であった心身鍛錬運動を農民道場の分析として考察する（大阪藍野塾）。こうして身体と精神を通して、農民の生活世界をいかに改変しようとしたかを明らかにする。

以上の分析を通じて農本思想の歴史的・現代的意味を明らかにしたい（終章）。

なお大正・昭和前期の農本思想をめぐる運動・政策の鳥瞰図を図序2として掲げておいた。次章以下、必要に応じて同図を参照されたい。

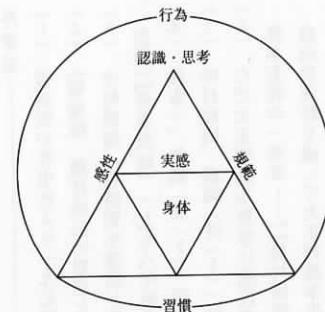
また史料についても付言しておけば、とりわけ第二部、第三部に関しては、未公開史料（日記・書簡・草稿・檄文など）をはじめ、従来未利用の文書（機関誌、事業報告書など）を多く利用している。しかし史料的な不備から一方で聞き取り（アンケート調査も含む）に依拠する部分も少なくない。この点をあらかじめ断っておきたい。



図序-2 農本思想をめぐる運動・政策の鳥瞰図

- (1) 復刻版が青史社より一九七四年に刊行されている。
- (2) 『増補版 現代政治の思想と行動』(未來社、一九六四年、『丸山眞男集』第三卷、岩波書店、一九九五年)所収。
- (3) 中村政則「経済更生運動と農村統合」『ファシズム期の国家と社会—昭和恐慌』(東京大学出版会、一九七八年)、林宥一「農民自治会論」『世界政経』一九七八年新春号、など。
- (4) 林宥一、前掲(註(3))論文。
- (5) 中村政則、前掲(註(3))論文。
- (6) ただ大正期農本思想に独自の位置づけを与えている論文としては、栗原藤七郎「非国家主義的農本主義思想について—昭和初期の農本主義の一潮流—」『農村研究』一九七二年二月、を参照されたい。また大井隆男「農民自治運動史」(銀河書房、一九八〇年)も、農民自治会運動を通して大正期農本思想に独自の意義を与えている。さらに安田常雄「日本ファシズムと民衆運動」(れんが書房、一九七九年)、同「農民自治と農村自治」『歴史公論』第一一〇号、一九八五年、も農民自治会をめぐる大正期農本思想の核(農本部分)に個人原理やコスモポリティックな性格を認め、その可能性を示唆している。
- (7) 安達生恒「農本主義論の再検討」『思想』第四二三号、一九五九年。
- (8) 筑波常治「日本人の思想」(三一書房、一九六一年)。
- (9) 網沢満昭「日本の農本主義」(新装版、紀伊國屋書店、一九八〇年)七頁。
- (10) こうした思想は農政思想だけではなく、その周辺の教育者や学者も共有していた。たとえば社会政策学会第八回大会(一九一四年)では「小農保護問題」をテーマとし、農業経済学者らは、小農に政治的・軍事的・衛生的・道徳的・社会的価値を見出していた(近藤康男編『明治大正農政経済名著集二三 小農保護問題』農山漁村文化協会、一九七六年、八〇〜八二頁)。
- (11) 農本という用語は、たとえばすでに農政学者・横井時敬(一八六〇〜一九二七)によって明治期に使用されていたが(横井「農本主義」一八九七年)、広く社会的に使用され始めるのは昭和初期の五・一五事件(一九三三年)以降のことである。じっさい本書で取り上げる大正期の農本思想家たちは、農本という概念で自らの思想を語っていない。のみならず昭和期に入ると、時の流行する農本主義に批判を加えている。しかしながら、彼らの思想も「農を基軸とする」という意味では同じであり、本書ではあえて大正期のもも含めて農本思想と呼称した。また本書では、同時代において広く社会的影響力をもった農本思想を扱うため、農をめぐる思想を網羅的に取り扱うことはしない。たとえば柳田国男や宮沢賢治など、学問上の功績や思想としての可能性、あるいは後世への影響力が大きかったにもかかわらず、社会運動や政策として同時代に広く社会的影響力をもちえなかったという意味において、本書の考察対象には含まれない。

- (12) 以下の数値は、安藤良雄編『近代日本経済史要覧(第二版)』(東京大学出版会、一九七九年)二五頁、による。
- (13) なお、坂本慶一「農学における『価値』の問題」『農林業問題研究』第六四号、一九八一年九月、は農(学)を「人間的生(生命・生活・人生)」の視角からとらえる見方を提示しており示唆を受けた。
- (14) この点については、筒井清忠「昭和期日本の構造 その歴史社会的考察」(有斐閣、一九八四年 三一頁。また、橋川文三(筒井清忠編・解説)『昭和ナショナリズムの諸相』(名古屋大学出版会、一九九四年)における橋川の論稿(とくに「昭和維新の論理と心理」)および筒井の解説をも参照。
- (15) 鈴木貞美編『大正生命主義と現代』(河出書房新社、一九九五年)一三頁。また「生命主義(vitalism)」とは「思想一般において、『生命』という概念を世界観の根本原理とするもので、十九世紀の実証主義に立つ目的論・機械論による自然征服観に対立する思想傾向をいう」(同書、三頁)。なお類書に鈴木貞美編『生命』で読む二〇世紀日本文芸(『国文学解釈と鑑賞』別冊、至文堂、一九九六年)、鈴木貞美『生命』で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開(日本放送出版協会、一九九六年)、がある。
- (16) 総力戦体制(戦時動員体制)のもつ意味については、山之内靖の以下の論稿が示唆に富む。「戦時動員体制の比較史的考察」『世界』一九八八年四月、「戦時動員体制」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』(有斐閣、一九九二年)、「方法的序論——総力戦とシステム統合——」山之内靖/ウィクター・コシユマン/成田龍一編著『総力戦と現代化』(柏書房、一九九五年)。また「(インタヴュー)総力戦・国民国家・システム社会」『現代思想』第二四巻七号、一九九六年六月、も参照。
- (17) すなわち本書でいう生活世界とは、一種の非物質的な静態的構造を想定しているのだが、



図序-1 思想・運動を創出する場としての生活世界

あえて図示すれば上図のようになる。

ここに図示したとおり、私たちの生活世界は、いわば「身体技法(M・モース)としての習慣を基盤として生み出される日常的な規範(物事の善悪に関する価値判断、日常的な感性(快不快・美醜・好悪等)に関する感覚、感情)から構成され、これら規範や感性は、日常生活ではふつう統合されて実感として私たちのものの見方を一定基準で形成する。そしてこの実感を土台として日常的な認識・思考が生み出され、実感とあわせて私たちの「準拠枠(Frame of reference)」として、通常の行為を支配する。この日常的行為が繰り返し反復されることで、それは再び習慣として固着し、私たちの生活世界は再生産されていくと考えられるのである。さらにこの生活世界の核として、身体が想定されることにも注意を促しておきたい。だから本書でいう生活世界とは、いわゆる身体性とはほぼ同義であり、社会史でいう「心性」(感じ、考える、その仕方(façon de sentir et de penser))

M・ブロック)を内包する概念であることをあらかじめ指摘しておこう。

この意味で、E・フッサールにはじまりA・シュッツをへてU・ハーバーマスにいたる生活世界論の系譜上に、本書の生活世界概念がおかれています。あえていうならば、シュッツのそれに近いという程度である。